
AFTER DARK

桃乃花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AFTER DARK

【Nコード】

N9756G

【作者名】

桃乃花

【あらすじ】

真夜中、突然旅渦がソウルソサエティへと侵入した。その旅渦は、なんと破面だった……。しかし決戦の冬はまだ遠い。藍染の目的とか何か？日番谷&一護、そしてたくさんの死神たちが戦う、長編ダークファンタジー。

NO・1*嵐の前触れ(前書き)

この小説は、残酷・出血のシーンが描かれる可能性があります。苦
手な方はご遠慮下さい。

NO・1*嵐の前触れ

「隊長、珍しいですね」

筆を滑らせていた俺は、松本の突然の言葉にふと視線をやった。

「何がだ」

俺がそう問うと、松本は自分の机の上の書類を指差して、言った。

「私の残ってる書類より、隊長の残ってる書類の方が多いですね？」と松本の書類を見ると、確かに俺の方がペースが遅いらしい。最初は同じくらいに分けていたはずなのだから。

「…そうだな」

確かに珍しいが、それを口にする程の事でも無い。俺は適当に流して、再び視線を書類にやった。

あれから、数時間経っただろうか。

気づけば、夕陽が沈もうとしていた。

そして、松本の机の上の書類が、珍しく無くなってしまっていた。

「…珍しいな、お前こそ」

ふと呟く。すると聞こえていたのか湯呑のすすっていた松本はむっとした顔をした。

「失敬な。私こそやる時はちゃんとやるんですよー？……隊長？」

「

松本が、不意に眉をひそめる。

なんだ、と問うと、松本は奇怪そうな顔をして俺を見た。

「…さっきと、書類の量変わってないじゃないですか」
「は？」

俺は自分の机の上に乗っている書類に視線をやる。

確かに、減っていなかった。

何故だ？俺はずっと…この机に向かって、書類を片づけていたはずだ。

「隊長…？大丈夫ですか？なんかオカシイですけど…」
松本が心配そうに俺を見る。

「大丈夫だ。松本、終わったならもう帰っていいぞ」
俺は筆を持ち直し、書類の手に取った。

松本は数秒、俺を見ていたがすぐに椅子から立ち上がった。

「じゃあ隊長、失礼します。…あまり、無理しないでくださいよ？」

「…ああ」
俺は視線を書類にやったまま答えた。

数秒後、執務室の扉が閉まる音が耳に響いた。

「ふう」

俺は小さく、溜息を吐いた。

やっと書類が片付いた、と思ったらもう月が輝いていた。

如何したんだ一体。あんな書類、いつもなら松本よりも早く終わるはずなのに…？

俺は考えながら、傍に置いてあった湯呑を手に取り、冷めたお茶をずずつと吸い込んだ。

「…帰るか」
そう小さく呟いた瞬間、だった。

「日番谷隊長！至急、一番隊隊舎へと来てください！！」

嵐の前触れは来ていた。

しかし、それを“覚悟”する準備はまだ整っていない

NO・2*隊主会

ザッ…

真夜中にも関わらず、隊長たちはこの場へと集められた。
理由は…旅渦の侵入だった。

「わざわざ集まってもらったのは、他でもない　旅渦が、ソウルソサエティに侵入した」

ドクンッ…

隊長たちの表情が、真剣になった。

「人数は未だ不明。じゃが、現在は3人確認されておる」
3人。決して少ない数では無い。ソウルソサエティに侵入する、ということはあるの結界を破ってきたことになる。その成すことが出来るのは、相当の兵でないと不可能だ。

「各隊、それぞれ隊員たちを配置し、迎撃に備えよ！！良いか、決して逃がしてはならぬ！必ず捕まえるのじゃ！！！」
「バン、と総隊長の杖が床を叩き付けた。
その瞬間、隊長たちは瞬歩でその場から去っていた。

チッ

俺は、瞬歩で進みながら小さく舌打ちをした。
先程まで書類整理をしていたせいかわ、物凄く体がだるい。
早く、松本を起こしに行かないと

「あれ？この羽織…隊長格？」
ゾクッ

背後から声がして、ぱつと振り向く。

刹那…

「可愛い　　つつっ！！！！！！」
ぎゅっっっっっっ

…は???

俺は全身に、生温かさを感じた。

はっと我に返ると、自分が誰かに抱きつかれている、ということに気づいた。

「な、なんだてめっ…?!?!」
慌ててそいつを突き飛ばす。突き飛ばされたその体はふっと宙に浮いた。

「えーっ！この子、ホントに隊長さんなのお?!超可愛いんだけどお!!!」

…女?この声、喋り方からして、女なことに違いは無い。ただ暗闇のため目が利かないから、その姿がよく見えない。

「…落ち着いてくださいロツティ様、こいつが藍染様の言っていた日番谷冬獅郎でございます」

!!!

藍染、だと…!?

またすぐ傍で、違う者の声がした。今度は男らしい。低いテノールの声だった。

この女は、ロツティというらしい。

「え!この子が…日番谷冬獅郎なの?」

女の方が驚いた声を上げた。

「そっかあ…残念だなあ、折角可愛い顔してるのに」

サアア…

周りの木々が、風に揺れた。

月明かりに照らされ、一瞬2人の顔が目映った。

「…お前らは　　!!!」

目の前を揺れる金色の長髪が、サアア…と音を立てた。

NO・3* “貴方が弱いだけ”

丁度その頃、副隊長及び席官には、黒い地獄蝶が飛んできていた。

「副隊長、及び席官に告ぐ！ たった今、旅渦が侵入した！ 各自、直ちに配置に着くように！ 以上！」

その知らせを聞き、松本乱菊はぱちつと目を覚ました。

旅渦ですって？ しかもこんな夜中に？

睡眠不足は肌に悪いのに…！ とか思いながらも、傍に立てかけてあった灰猫を手にとって外に飛び出した。

スウウ…と横切る風がひんやりと冷たい。蜂蜜色の髪の毛がたまに顔をかするのが痒くて仕方ない。

でも今はそれよりも、自分の隊の隊長のことで頭がいっぱいだった。

もう既に敵と遭遇していたら…。

そう考えると、一刻も早く向かわなければならぬ。

刹那、日番谷の霊圧が跳ね上がったのが分かった。恐らく敵と戦っているのだろう。

「隊長…！」

乱菊は、急ぐ足を進めた。

「破面 …！」

馬鹿な…何故、破面が？ 決戦は冬のはず …

「…っ」

チリ、と刀が頬を掠る音がして、左手の甲で擦ると微かに赤い血がついた。

「あー勿体ないわ！ 折角の可愛い顔が、台無しなもの！ ちょっとサウザン、あんまり顔は狙わないでよ！！」

ロツティが悲鳴に近い声で叫ぶ。それを聞いてサウザンと呼ばれた

もう一人の男が呆れた顔でロツティを見た。

「ロツティ様、そいつは敵でございますよ？」

「敵だからなによ?!この子、私のお気に入りなの!あんまり傷つけないで!!」

…何がお気に入りだよ。可愛いとか言うな、ムカツクから。

俺がむすつとしてロツティを見ながら、刀を構え直す。

「しかし全く、なめられたもんだな…」

ぼそつと呟くと、案の定サウザンに聞かれていたらしく、サウザンはくくつと笑い声を漏らした。

「なめる?私がいっ貴方をなめたんです?私はいつも、全力ですよ。ただ…」

スウ、と風を切る音がして、サウザンがその場からフツと消えた。

「!!!?」

何処へ行った?!

「貴方が弱いではありませんか？」

背後でサウザンの低い声があった。

!殺られる!!!

ガキイーンッ

刹那、刀が重なり合った鈍い音が耳に響いた。

視界に映ったのは、綺麗な蜂蜜色の長い髪の毛。

そして、サウザンの刀を受け止めた…灰猫を構えた、松本だった。

NO・4*現世へ

「!?!?!?」

サウザンの細い目が、少し大きく開かれた。

「松本!」

「隊長、大丈夫ですか?」

久しぶりに真剣な顔をした松本が、ちらつと俺の横目で見ながら言った。

「ああ」

俺はこくつと小さく頷き、ひょいっとサウザンと距離を置いてまた刀を構え直した。

「あー:ダメね、新手が来ちゃったわ。それじゃあ、一旦引きましようかサウザン」

「そうですね:残念ですが、仕方ありませんね」

サウザンはロツティの方を向き、そのままシュウツ…と姿を消した。

「ふう…」

俺は浅い溜息を吐いた。あの時松本が来ていなかったら…。

「礼を言うぞ松本」

俺は松本を見て言った。すると松本はにこつと微笑んだ。

「いえ、隊長がご無事でなによりです」

松本がそう言ったその時、遠くから足音が響いてきた。

「隊長ー!日番谷隊長ーツ!」

「なんだ!」

自分が呼ばれていることに気付き、返事を返す。走り寄ってきたのは、十番隊の隊士だった。

「隊長、総隊長が直ちに一番隊に来るようにと…」

「分かった、すぐ行く。松本、後は頼んだぞ」

「はい」

俺は松本にそう告げて、瞬歩で一番隊へと向かった。

「総隊長！御用件は何ですか」

シュ、つと瞬歩で現れた俺に、総隊長は問うた。

「うむ、お主が先程戦っていたようだったからの…旅渦は何者であつた？」

「は…それが、破面、でした」

「…破面じゃと？しかしまだ…冬は遠いはず」

総隊長が眉を顰めながら言った。俺も頷く。

「そうか、分かつた。それでじゃ、お主には現世へ行ってもらおう」

「現世へ、ですか？…黒崎一護ですか」

俺の問いかけに、総隊長は大きく頷いた。

「破面となれば…黒崎一護の力も、必要となるかもしれぬ。穿界

門の準備は出来ておる」

「…分かりました」

俺は小さく頷いて、また、シュツと瞬歩でその場を去った。

NO・5*爆発

現世では、誰もが寝静まっていた。
街の明かりは殆ど無く、寂しいくらい真っ暗だった。

少し肌寒い風が、ヒユウ…と吹いた。

黒崎一護の家の屋根で、真っ黒の着物を纏った銀髪の1人の少年が居た。

ガララ…

窓は驚いたことに、鍵が閉められていなかった。

「 不用心だな… 」

俺が思わずぼそっと呟いた瞬間。

「 つ！？誰だ！？ 」

ベットの上で寝ていた黒崎が、ぱっと起き上がって俺の方を向いて叫んだ。

「 ……馬鹿野郎、声がでかいんだよ 」

「 え…冬獅郎？ 」

黒崎の素っ頓狂な声が聞こえる。

「 ああ。緊急事態なんだ。済まないが、ソウルソサエティに来てくれないか 」

「 はあ?!今から?! 」

黒崎も流石に驚いた声をあげる。そして慌ててベットから出て、部屋の明かりをつけた。

「 おい、だって今夜中だぜ?こんな時間に… 」

「 旅渦が侵入したんだ 」

「 ……!!! 」

俺の一言で、黒崎の表情は一変した。

「…分かった」

そう言つて、黒崎は義魂丸を丸飲みし、死神化して窓から飛び出した。

…

「ロツティ様、他の者たちは何処へ？」

「え？えーつとお…確か…：十三番隊をぶつ潰しに行ったわよ

」

風がヒュウ…と吹いた。ロツティの表情は、あまりにも残酷な、楽しそうな顔をしていた。

…

「隊長！こちら、異常はありません」

シユ、と瞬歩で現れたのは、十三番隊朽木ルキア。腰に袖の白雪を構えて、真剣な表情をしていた。

「そうか、分かった。こちらも特に異常は無い」

十三番隊隊長、浮竹十四郎はこくつと頷いて、空を見上げた。

嫌な予感がする。

何故だか、そんな気がした。

「そうだ朽木、この戦いが終わったら、海燕の」

浮竹が何かを言い終える前に、爆発音が響き渡った。

「！?!?!?!」

「なんだ！？朽木、向かうぞ！」

「はいっ！！！」

驚いている暇など無い。すぐさま切り替え、その爆発地へと向かつ

た。

「 総隊長！只今連れてまいりました 」

「 うむ、御苦労であった 」

総隊長は細い目を更に細め、こくりと頷いた。

「 総隊長さん！一体何が起きてんだ？ 」

俺は総隊長に詰め寄る。総隊長はゆっくりと口を開いた。

「 先程、旅渦がソウルソサエティに侵入したのじゃ。人数は3人を確認、じゃがまだ居るじようだ。決して少なくは無い 」

「 しかも、ソウルソサエティのあの結界を破ってきた。相当手強い奴らだ 」

ドクンツ…

2人の話を聞き、心臓が大きく跳ね上がった。

「 俺もさつき対峙したが、藍染と言っていた。しかも、割れた仮面…破面たちだった 」

「 破面！？決戦は冬じゃ…?! 」

冬じゃないのか。そう言い終える前に、冬獅郎が口を開いた。

「 そうだ、だが藍染は何かを企んでいるのだらう。油断は禁物だ 」

…何かを、企んでいる。藍染は一体、何を…？

ズウウン…

「 ルキア?!?!? 」

俺は、ルキアともう一人…誰かの霊圧が上昇していることに気づいた。

誰かと戦っているのか?!?こうしちゃ居られない…!!

「っおい黒崎！待て」
俺は冬獅郎が止めるのを無視して、ルキアの所へ猛スピードで向かった。

爆発が起きた所へ着いた。…だが、誰も居ない。爆発の後が残っているだけだった。

「隊長…これは…？」

「…分かんが、ここは確か…8席前後の者たちが配置されていたはず…」

浮竹も奇怪そうな表情で爆発後の場所を見つめる。

その時だった。

「ひゃっはああ！！おいそこの白髪と黒髪！」
大声と共に、ダアンツと着地する音が響いた。

「俺様の名は、カレッジ・サンドリア！お前らを葬りに来たぜ！」

「やたらとテンションの高い男だな、と思い、ふと頭を見ると、なんと…」

「ア、破面！？！？」

ルキアは驚きのあまり、目を見開いた叫んでしまった。

「そうさ、俺様は藍染サマの命令で、ソウルソサエティに来たのさ」

「藍染だと…！？！？」

ルキアはちらっと浮竹を見ると、浮竹は顔を顰めて破面をじっと睨んでいた。

「ここに居た者たちは如何した？」

ずっと黙っていた浮竹が、ようやく口を開く。

その問いに、破面…カレッジは、ニヤリと口角を上げて不気味に笑

った。

「ああ…そいつらは今頃、マシューに葬り去られているだろうな」

「……！」

マシュー、だと？まだ仲間がいるのか…！

「貴様…！」

浮竹の霊圧が、ぐんつと上がる。しかしその瞬間

「ゴフツ！ゲフツ…！」

「隊長っ！」

浮竹は急に咳き込みだした。ルキアは慌ててその背中をさする。

「ん…？そいつは、何か病でも抱えてんのかあ？？」

しまった…！このままでは、隊長が殺られてしまっ…！！

「まあ、今は放っておいてやるよ。まずは…！」

シュンツとカレッジが消え去り、ルキアは周囲を確認するが、何処にも居ない。

刹那…

「お前からだな…！！！」

気づいたのが遅かった。カレッジの刀が、目の前まで迫ってきていた。

……しまった、殺られる…！！！！

ルキアがぎゅっと目を閉じた、その時だった。

NO・7*「野暮用が出来ちまった」

殺られる
！！！！

そう思った時だった。

ガキイイインッ

カレッジの刀を、何者かが遮った。

「いつ…一護！！！」

「ルキア、大丈夫か？」

ぐぐ、っと力を込めて、カレッジを後方へ押し出す。

「一護、何故ここに！？」

「緊急事態だって呼ばれてな」

俺はそう言つて刀を構えなおし、じつとカレッジを睨みつけた。

「黒崎！」

数秒後、冬獅郎が瞬歩で現れた。

「馬鹿、勝手に行くんじゃないよ」

ぎつと冬獅郎に睨まれ、俺は苦笑いをして誤魔化した。

そんな俺を冬獅郎は無視して、敵の方へ視線をやった。

「奴は…あいつらと同じ、破面か…」

冬獅郎が、ズウン…と霊圧を上昇させる。

しかし、カレッジは一步退き、刀を鞘におさめた。

「！？何してやがる…？」

俺は眉を顰めながらカレッジを見る。

「お前、日番谷冬獅郎だな？」

「…何故、俺の名を知っている？」

冬獅郎も、眉を顰めながらカレッジを見た。すると、カレッジはククツと笑いながら言った。

「ちよいと、野暮用が出来ちまった…お前らの始末は、また今度にするでしょう」

刹那、カレッジの姿は何処にも無くなっていた。

「…あいつら、一体何なんだ…??」

「何故日番谷隊長が来たら姿を消すのだ…？」

カレッジが姿を消して数分後、俺たちは一番隊へと向かっていた。

「とりあえず、総隊長に報告しないといけねえ。黒崎、お前も来い。朽木は浮竹を頼むぞ」

「はっ！」

冬獅郎がそう言つと、ルキアはたたと浮竹の方へ駆け寄って行った。

「はあ…めんどくせえ事になったな」

冬獅郎がぼそつと呟いたのを、俺は、ははつと笑いながら聞いている。

NO・8*派遣

「…な、なんでだよ!!?」

一護は遊子と夏梨に聞こえない程度に怒鳴った。

事は数時間前…

「…そうじゃの、では日番谷隊長、頼むぞ」

「はい」

空には、既に朝日が差し込もうとしていた。報告に向かった日番谷は、事の次第を総隊長に報告した。

総隊長は、破面がソウルソサイエティか現世か、どちらに急襲してくるか分からないから、数人を現世に送り込むと言った。

そして派遣されてきたのが、この五人だった。

「…なんでお前らなんだよ…!!」

一護は額に手を当てて絶句する。そんな一護を三人は笑いながら見

ていた。

三人というのは、松本乱菊、朽木ルキア、阿散井恋次、もう二人というのは、日番谷冬獅郎と…

「はじめまして、十番隊三席の笹城楓です！よろしく願いしますっ」

にこやかに話す、笹城楓と名乗った少女。

「ども、黒崎一護です」

一護は遠慮がちに頭を小さく下げて言った。

夕暮れ時、一護の家の前で、六人は輪になって会議をしていた。

「…んで、ここに泊まるのは、どいつなんだ？」

一護が日番谷に問うと、横からルキアが割って入った。

「私はこの小汚い押入れにするぞ！」

「しつれーな事言うな！泊めねえぞお前！」

ルキアを怒鳴り付け、一護は再び冬獅郎に向き直った。

「そうだな…とりあえず朽木はそんな中に泊めて、あと…松本は、井上織姫ンとこ泊めてもらえ。阿散井と笹城は、ここでいいだろ」

一護が嫌そうな顔をするのを無視して、日番谷はぱっと決めて、一護のベッドの上にどさっと座った。

「冬獅郎はどーすんだよ？」

「俺か？俺は…適当にどっか泊まる」

「あっじゃあ隊長、織姫のところ一緒に行きましょうよ！楽しいですよ」

「断る」

松本の言葉に日番谷は即答して、すたすたと去っていく。

「あつたいちよー待って下さいよお」

そんな日番谷を乱菊はいそいそと追いかけるように行った。

ルキアと恋次、楓は一護の家の中に入って行く。

はあ、と一護が溜息を吐いたのは、誰も知らない話である。

＊＊

オリキャラ、ささきかえで笹城楓ちゃんです。
可愛い子ですよ、桃乃花イメージでは。

NO・9*恐ろしい霊圧

現世では、既に月が輝いていた。

「織姫ー！この料理やばい！すごい美味しいじゃないのー！！」

「そうですねか?!?!嬉しいなあ、誰も食べてくれないからあたしの舌がオカシイのかと思ったよ」

「大丈夫よ！あたしが保証したげるわ！」

日番谷は織姫が出てきた料理を恐れて、きゃあきゃあとはしゃぐ女2人をよそにピピピッと携帯をいじっていた。

結局行くところが無く、松本の行く織姫の家に来てしまったが、やはり間違いだつたかもしれない…と思うのはもう遅い。仕方なく、この2人に付き合わざるを得ないのだ。

虚は居ないか…と、ふっと溜息を吐いたその時

…

ズズズウウン…

物凄い霊圧が、全身を震わせた。

「……………松本……」

「はい……」

先程とは大違いの真剣な表情で、日番谷と松本は互いに目を合わせて、義魂丸を飲み込み死神化し、織姫の家を飛び出して屋根の上へと飛び立った。

一方、一護たちは…

「おいお前ら、晩飯は一応少しずつ用意してやったからそれ食って我慢してろ。」

そう言つて一護が出してきたのは、焦げた焼き飯だった。それは夥おびただしい匂いを発している。

「おい…これ、誰が作ったんだ？」

「え、俺だけど…」

一護は苦笑いをして質問に答えた。

それを聞き、恋次とルキアの顔がみるみるうちに青くなっていく。

それは、ルキアを助けに行った時の事。

四番隊に入院していた恋次の見舞いに、一護が行った時のことだった。

「よ、恋次！見舞いに来てやったぜ。」

そう言つて一護が持っていたのは、得体のしれないモノ…焼き飯だった。

「い、一護…そりや何だよ…？」

恋次が恐る恐る聞くと、一護は笑顔で答えた。

「焼き飯だよ。俺の得意料理なんだ。」

それを口に含んだ瞬間の、爆発的な破壊力といえは…。

後から来たルキアがそれを食べて、数日腹の調子がおかしかったのもまた事実である。

「い、一護！俺なんか買ってくるから、お前それ自分で食べるよ！」

「そ、そうだぞ一護！腹が減ってるだろう！？」
焦って言う恋次とルキアをよそに、楓といえはその恐るべし焼き飯をばくばくと口に入れて、美味しいじゃない、とか呟いていたのは誰も知らない…。

「え？いや俺、さっき食べ…」
一護が言い終えようとした瞬間

ズズズウウン…

物凄い霊圧が、一護たちを襲った。

「！！恋次、ルキア、楓！」
「ああ！」

三人は死神化し、窓から外へ飛び出した。

NO・10*戦いの火蓋

「なんだこの霊圧は…！？尋常なモンじゃねえぞ！」
恐ろしい霊圧に、ずんつと押し潰されそうになる。

刀を鞘から引き抜き、ぐつと構えた。

「来るぞ松本、構えろ」

日番谷の言葉に、乱菊が刀を構えた瞬間

シュンッ…

目の前に、2人の破面が姿を現した。

それは、紛れもなく…

ソウルソサエティで対峙した、ロツティと、サウザンであった…。

「ルキア！大丈夫か！？」

おびだた
夥しい靈庄に今にも押し潰されそうで、一護はルキアに視線をやった。

「大丈夫だ！それより今は敵の靈庄に集中しろ！とりあえず、日番谷隊長たちのところへ……」

ルキアはそう言いかけた瞬間、恋次がふっと足を止めた。

「恋次？如何したのだ？」

隣で走っていたルキアが不思議に思い後ろを振り返った。すると恋次は刀に手をかけ、言った。

「来るぜ！」

恋次はにやつと口角を上げて、刀を鞘から抜いた瞬間

シュンツ……

四人の破面が、姿を現した。

「はじめまして、私はアレックス・バージンと申します」
先頭に立っている破面が、そう言ってゆっくりと、小さく頭を下げた。

「……お前ら、あん時の……！」

「ハア……イ少年、久しぶりね！あら？あの時の副隊長サンも一緒なの？仲良いのね貴方たち」

ロツティはくすくすと笑いながら言う。サウザンはそんなロツティを横目で見ながらも、日番谷と乱菊に意識を集中させていた。

「隊長と副隊長の関係だ、一緒に居て当たり前だろ」

日番谷は無表情で言い放ち、ロツティとサウザンと交互に睨む。

「フフ…まあいいわ。これも全て、藍染様のためなもの…」
にやりと笑うロツティは、ズズ…と霊圧を高めていく。
その強大さに、目を見開く程であった。

「隊長、これは…!？」

「ああ、気を抜くな松本！」

日番谷は驚く乱菊にそう言っで、ぐつと刀を構えなおした。
乱菊もちらつと日番谷を見て、灰猫を構えた。

…

「周りの者は、私の部下でございます」

丁寧な口調で話すアレックスという破面は、腰に収めていた刀をス
ウツと抜いた。

「強いですよ、勿論」

刹那、一護の刀に衝撃が走った。

「一護！」

ルキアが叫んだ瞬間、四人のアレックスの部下たちが一斉に斬りか
かってきた。

ガキインツと刀のぶつかりあう音がして、戦いの火蓋が切って落と
された…

NO・11*オカシイ。

「チツ…尋常じゃねえぞこの霊圧…！」
刀を持つ手に、汗が滲んできた。日番谷はロツティを睨みつけながら、ぐつと刀を構えなおす。

「アタシがこの子をやるから、サウザンはその副隊長サンをやっっちゃって？」

ロツティがそう言うと、サウザンは乱菊の方を向いて頷いた。

「御意」

刹那、乱菊の刀に吸いつくように、サウザンの刀とぶつかり合った。

「松本！」

日番谷の視線が微かに乱菊に行く。

「大丈夫です！隊長は自分の戦いに集中してくださいっ」

乱菊がサウザンの刀を抑えながら、日番谷に向かって叫ぶ。日番谷はこくつと頷いて、ロツティに集中する。

「クスクス…」

ロツティは、不気味に笑いながら腰の刀を抜く。

「ダメよ、今の貴方はアタシに勝てないわ」

「如何いう意味だ」

日番谷は眉を顰めてロツティに聞く。

だがロツティは何も答えず、日番谷に斬りかかった。

「…つ…つ…」

一方一護は、アレックスとの戦いに集中出来ていなかった。

理由は、遠くに感じられるある霊圧。

それは一護でもはつきりと感じ取れる程の強大なもので、それと戦っているのが日番谷ということが気になって仕方が無かったのだ。

それは、乱菊から聞いた話だった。

「一護」

不意に乱菊に呼び止められた俺は、ん、と振り返る。

「あのね、実は隊長、この頃おかしいのよ…」

心配そうな表情で、俺を見つめる。

「おかしいつて、如何？」

俺も少し心配になって、乱菊さんに問うてみた。

「それが…」

乱菊さんがそう言いかけた瞬間、冬獅郎の呼ぶ声が聞こえた。

「あ、隊長が呼んでるみたい。また後で話すわ、じゃあね」

乱菊さんはそう言っつて、足早に部屋を去って行った。

…

乱菊さんは何を言おうとしていたんだ？

冬獅郎は、何処がおかしいっていうんだよ？

そんなことを考えていたら、戦いになんて全く集中出来なかった。

「クソッ…！」

顔を顰めて、かろうじてアレックスの刀を受ける。だが、押されて
いるのは確かだった。

「ダメですね。貴方は全く、ダメだ…強くない」

アレックスが、一護の目を見て言う。

「なんだと…？」

「強くない。そう言っているんです。仲間を思うのは大切です…

しかし、戦いの最中にそれを考えるのは良くない」

アレックスは刀を振り上げる。

気づくのに遅れた一護が、はっと振り上げられたアレックスの刀を見やる。

その瞬間、アレックスの刀は勢いよく振り下ろされた…

NO・12*求めていたもの

ガキインツと刀がぶつかり合う音が響く。

日番谷とロツティは互角、またはロツティの方が押しているのかもしれない。

乱菊とサウザンの戦いもまた、サウザンの方が押していた。

ダメだ、いつも通りに戦えない…何故だ？

ロツティの刀を防ぎながら、日番谷は考えていた。

実力は、もっと上のはずなのに…いつもと違って、刀が上手く扱えない。

そうだ。振り返ってみれば、最近自分はおかしかった気がする。

ダメだ、今は戦いに集中しないと…

そう思い、ロツティとの戦いに意識を集中させる。

そして、氷輪丸を振るった。

ポタタツ…と、肩から血が大量に零れおちた。

一護は息を切らせながら、斬られた肩を手で抑える。

…結構、深いな…。

「チツ…」

軽く舌打ちをし、口の中の血をぺっと吐き出す。

それを見て、アレックスはククツと笑う。

「ああ、もうすぐですね」

「もうすぐって、何がだよ…」

「一護はせえせえと言いなから問う。」

「フフ…藍染様の求めていたものが、もうすぐ手に入るのでですよ」

「藍染が、求めていたもの、だと…？」

呂律が上手く回らず、途切れ途切れに言葉を発する。

クソ、目の前がくらくらしてきやがった…血イ出しすぎたか…？

「ええ、藍染様が求めていたもの…」

アレックスが空を煽り、血刀をピツと振った。

そこについていた一護の血が、ヒュツと宙を舞う。

「日番谷冬獅郎、ですよ」

「……………」

アレックスの言葉に、一護は言葉を失った。

日番谷、冬獅郎だと…！?!?!?!?

冬獅郎が、危ない…!!!!!!

そう思うにも、目の前が霞む。足元がふらふらと覚束無い。

「く、そつ…とう、し、ろ…」

そしてそのまま、地面へと落ちていった。

…

「ねえサウザン、アタシそろそろ飽きちゃったんだけど」

ロツティが日番谷と一旦距離をとって、サウザンに向かって言う。

サウザンは少しロツティに視線をやり、小さく頷いた。

「そうですね。では、そろそろ終わりにしましょう」

「そうね！藍染様が待っているもの、早くお持ち帰らないと…」

ロツティが微笑みながら言って、日番谷を見る。

「貴方を、ね」

「…は…???」

そう言った瞬間、ロツティの姿がフツと消える。

刹那、日番谷の目の前にすつと現れた。

「隊長ッ……………」

乱菊が悲鳴に近い叫びを上げ、日番谷に走り寄ろうとした瞬間、サ

ウザンの刀が乱菊の腹を貫いた。

「ぐっ……!!!?」

乱菊は激痛に顔を顰め、そのまま地面へと落ちて行った。

「松本!!!」

日番谷が叫んだ瞬間、ロツティの左手が日番谷の肩へと置かれた。

「無傷で、って言われてるんだけど…抵抗しちゃうから、ダメよねえ?」

ロツティが言い終えた瞬間、ロツティの右手に握られていた刀が日番谷の腹を貫いた。

「っ…ぐ…ッ」

日番谷もまた激痛に顔を歪めた。そして意識を失った所を、ロツティが支える。

「ごめんなさいねえ?でもこれも全て、藍染様のためだもの…」
につこりと微笑むロツティの肩に、日番谷はぐったりと倒れこんでいた。

「　　っ!?!?!?!?!?」
「　　ぱちつと目が覚めて、一護はぱつと起き上がった。」

「　　っぐ…」
「　　肩に激痛が走り、またふらつと床に倒れこんだ。
　　そういえば俺、さっきまで破面と戦ってて…それで…」

「　　おや黒崎サン、目が覚めましたか」
「　　浦原の声が急に、一護はうわつと驚きの声を上げた。」

「　　浦原さん!え、なんで…」
「　　いえ、昨日阿散井サンたちが慌ててアナタを運んできましたね
　　…驚きましたよ、そりゃあ」
「　　浦原は扇子をぱたぱたと扇ぎながら、手を振って言う。
　　…ん?恋次…?」

「　　…ああッ!!!…う、浦原さんっ!冬獅郎は?!?!?!?」
「　　一護は慌てて立ち上がり、浦原に詰め寄る。浦原は少し仰け反って、
　　一護の肩をぼんつと叩いた。」

「　　いつっ…!」
「　　一護は顔を歪ませながら、布団の上に倒れこんだ。
　　結構深かつたんですから、あまり動かない方がいい。井上サン
　　が来るまで我慢してください」

「　　それより!冬獅郎はいるのか?!?!?」
「　　一護は叫ぶ。その時、障子がパンツと開いて、恋次とルキアが入っ
　　てきた。」

「　　恋次、ルキア!お前ら、無事だったのか…?」
「　　あつたりめえだろ!お前が弱すぎんだよ馬鹿!!!」
「　　いいか、井上が来るまで寝ている」

ずいつと詰め寄せられ、一護は渋々布団の上へ寝転がった。

「それより、冬獅郎は…」

一護はその名前を呼んだ瞬間、2人はぐつと言葉に詰まり、俯いた。「破面の奴らが言ってたんだよ！藍染が求めていたもの…冬獅郎だつて！！」

「ええ。日番谷サンは此処には居ませんよ」

浦原が妙に真剣な顔で、一護を見ながら言った。一護はクルツと浦原の方を向いた。

「日番谷サンは…夜虚宮に拉致された、と思われませう」

「……………」

浦原の言葉を聞き、一護の目が見開かれる。

「ど、如何してだよ?!なんで冬獅郎が…!!?!」

「落ち着いてください黒崎サン。…藍染が何故、日番谷サンを求めたのか。それは…」

浦原は焦る一護を制し、ちゃぶ台の傍に座って湯呑をずずっと吸った。

全員の視線が、浦原の方へと集まった。

「…日番谷サンの卍解が、不完全だからですよ」

「如何いうことだ…?」

一護はゆっくりと上半身を起こし、浦原の目をまっすぐに見る。

「日番谷サンは、卍解が不完全にも関わらず隊長に就任した。つまり、卍解を完全に習得すれば、更なる強大な力を得ることになります」

「…つまり?」

「藍染は、日番谷サンを利用しようとしています。恐らく、強制的に」

強制的に。

つまり、何かを餌にしてして日番谷に有無を言わせないつもりなのだろう。

それは、幼馴染か、部下か、家族か、仲間か…。

「…クソッ！」

「護はちやぶ台をドンツと叩いた。」

俺は、仲間1人助けることも出来ない程、弱かったのか…！？

そう、思い知らされた。

NO・14*己の無力さ

「…っ」
クソ、意識が朦朧とする。頭がくらくらして、視界がぼやけている。なんだ、此処は何処だ…？

うつすらと瞳を開き、周りの様子を確認した。そして、先程までの記憶を辿った。

確か俺は、ロツティという破面と戦っていて…そして、松本が…。

「！松本はっ…」

「フフ、大丈夫よお？あの副官サン、致命傷程の傷は負わせてないから」

急に背後から声がして、俺ははつと振り返る。

「ようこそ虚夜宮へ。今から藍染様にご挨拶しましょうね？」
にっこりと微笑むロツティは、何処か嬉しそうで、寂しそだった。

後ろで両手首を縛られていた。その紐はなかなか解けず、仕方なく断念した。

「やあ日番谷くん…久しぶりだね」

懐かしい声がして、ふっと顔を上げる。数メートル上に、椅子に座って肘をついた藍染が、俺を見下ろしていた。
ドクンッ…

心臓が、大きく、高く、跳ね上がった。

あの時の、裏切り者が。雛森を裏切った奴が。
今、目の前に居る。

あの時受けた大きな傷に、微かな痛みを感じた。
ぐ、っと、縛られた右手の拳を握り締める。

許せない奴。雛森を、あそこまで追い詰めた野郎を、ぶつ殺してやりたい。

でも、俺には出来ない。

己の無力さを、思い知らされた。

「俺に如何して欲しいんだ、藍染」

コイツが俺を求めていたということは、何かを企んでいる。それは確かだ。

それなら、コイツは俺を遣って、何をしようとしている？

「フフ…キミには、私の味方についてもらおうと思う」

「…!!!なん、だと…!!？」

俺は、また《…》裏切り者になるのか…？

「キミの信頼は絶大だろう。そんなキミが、ソウルソサエティを裏切ったなど、誰も信じまい。キミは友のために裏切る程の者だからね…」

「…！何故、それを…」

草冠の事件の時に、藍染は既に居なかったはずなのに…!!？

やはり、藍染は全てお見通し、というわけか…？

信じられないが、それが事実かもしれない。もしかしたら、何処かで見っていたのかもしれない。

「俺が、ソウルソサエティをそんな簡単に裏切ると思ってんのか…!!？」

「ちよつと！藍染様になんて口を利いてるの…!!」

ロツティの怒声があったが、そんなの耳に入ってこなかった。ただ、今は怒りを抑えきれなかった。

「…そうかい。良いのかい？キミの大切な…」

気づけば藍染がすぐ傍に居て、俺の耳元で何かを囁く。

「…!!!」

その言葉に、俺の目は見開かれた。

「…分かったかい？…キミに、拒否権は無いのだよ」

ふつと軽い笑みを浮かべ、藍染は俺の目を見る。既に決まっている、俺の答えを、待っていた。

俺は拳をぐつと握り締め、藍染を睨みつけた。

そしてゆっくりと口を開き、俯きながら静かに言った。

「は、…い」

“キミに拒否権は無いのだよ”

その言葉が、頭の中でエコーしていた。

俺はこんなに無力だったのか…？

仲間1人、守れないほどに…！！

俺は今、己の無力さを思い知らされた。

NO・15*「僕はそんなの、どうでもいい」

「とりあえず、部屋へ案内してあげてくれ」
藍染がロツティにそう言っていると、ロツティは嬉しそうに頷いて返事をし、俺を引つ張って歩き出した。

「お前、そんなに藍染が好きか」
俺の問いに、ロツティはドッキーンと跳ね上がって顔を真っ赤に染めた。

「なつ、何を急に!!! た、確かに藍染様は好きだ。大好きだ！何か悪いか!？」
「ロツティは開き直って俺に叫んだ。

「耳元でそんなに叫ぶなよ...」
「いや、別に」
俺がこいつにこんな質問をしたのが間違いだっただか...

俺はリアクションに困り、とりあえずこの話に終止符を打った。

「ここだ」
数分歩くと、大きな扉が目の前に現れた。

「でか...」
俺は思わず感度の眩きをした。
でかい。兎に角でかい。自分の、隊長格の自室とは比べ物にならないくらいでかかった。

「藍染様が、お前のために大きな部屋をご用意してくださいいたのだ。感謝しろ!!!」
口調変わってね?とか思うのは、まあ良しとしよう。
お前に感謝しろって言われてもな...。
てか、なんで感謝しねえといけねーんだよ馬鹿。

「どーも」

そんなこと言うところのまま殺されそうだなと思い、とりあえず適当にお礼を言った。

「ではまた後で来る。それまではここでじっとしているよ！」
ロツティはばたんつと扉を閉めて、つかつかと足音を立てながら去って行った。

…

「じつとしてろ、って言われてもな…」
斬魂刀は無い。霊力も何故か弱まっている。殺気石ということは、鬼道では脱出は不可能、か…。しかも、斬魂刀が取られていてはソウルソサエティに帰っても受け入れてもらえるか分からない。

その時だった。

「ひーつがーやは　ん　」

ゾクツ…

今、一番聞きたくなかった声。全身に悪寒が走って、鳥肌が立った。
「…い、ちまる…!!!?」
恐る恐る振り返ると、そこには案の定、市丸がにやりと口角を上げて立っていた。

「久しぶりやなあ、日番谷はん　」

バリバリの関西弁で喋りながら、俺の方へと歩み寄ってくる。

「遂に、藍染はんには捕まってもうたん?」

「…」

市丸の言葉を見無視し、俺は視線を逸らした。

「…まあ、藍染はん、日番谷はん欲しそうにしてはったからなあ…
…いつかはこうなると思っと思ったけど。こんなに早くになあ…」
市丸はぶつぶつと呟きながら、傍にあったソファにどさっと座りこ

んだ。

「…お前、なんで裏切ったんだ？」

俺は反対側に置いてあったソファに座り、市丸に問うた。

「…面白そうやったから」

「…は？」

市丸の思いがけない答えに、俺は間抜けな顔をした。

「面白そうやったから。ただそれだけやで？ソウルソサエティに、飽きてきたねん」

「…てめえ、それだけの理由で…！？」

俺はだんだんと怒りが増してきた。

ふざけんな。

「お前、松本がどれだけ苦しんだと思ってんだよ！！？吉良だつて…！分かってんのか、自分がどれだけ…！！！」

「落ち着きいな」

市丸は俺の怒声を無視し、クスツと笑う。

「僕はそんなのどうでもええねん。自分が良ければ全て良し。そう思ってるから」

そう言つて市丸はすつとソファから立ち上がり、扉の方へと向かった。

「まあ、せいぜいあがき。どうせ、日番谷はんは藍染はんには逆らえへんやろうから」

にや、と不気味な笑みを浮かべ、扉の向こうへと姿を消した。

「…クソツ」

どん、と小さなテーブルを拳で叩き、ソファの上へ、どさつと倒れこんだ。

NO・16*知りたいかい？

「で、浦原さん。一体どうすんだよ？」
織姫に治してもらい、一護は改めて浦原に向きなおった。

「そうですねえ…まずは、日番谷サンを奪還しないと」

浦原はぱたぱたと扇子を扇ぎながら、部屋の中にも関わらず深く帽子を被ったまま言った。

その傍で、ルキア、恋次、楓が座って聞いている。

乱菊は別の部屋で、織姫に治療してもらっていた。

「そんな簡単に言われてもな…」

ルキアがうつんと唸りながら言う。

「は、それだけのことだろ？じゃあ今からでも乗り込めばいいじゃないか！」

恋次が口角を上げて、ハイテンションで叫びながら、斬魂刀を握り締めてバツと立ち上がった。

「簡単に言うな！相手は藍染たちだぞ、油断は禁物だ！！」

ルキアが恋次の軽い暴走を止めて、無理矢理座りなおさせた。恋次はチツと舌打ちし、どさつと床に胡坐をかいた。

「…しかし、正面突破以外には方法は無いでしょう」

「…そうか。じゃあ、行くしかねえな！こんなことしてる暇があったら、一刻も早く冬獅郎を取り返しに行こうぜ！！」

一護はバツと立ち上がり、斬魂刀を背中に担いで地下勉強部屋へと歩きだした。

「ちょ、一護…」

「いーじゃねえか！やってやろうぜ、ルキア！」

恋次も先程のテンションを取り戻し、大賛成と言わんばかりの更なるハイテンションで、ぱたぱたと一護の後を追った。

「仕方無いな…笹城殿、行きましょう」

ルキアははあつと溜息を吐き、傍に置いてあつた斬魂刀を手にとつ

て楓に声をかけた。

…

「 藍染はん、日番谷はん案外冷静沉着やったわ。まあ、怒ってはりましたけど 」

「 ……そうかい。まあ、彼ならそうだろうね 」

藍染は表情を変えず、市丸の話を聞いていた。

すぐ傍で、東仏がまた無表情で直立不動していた。

「 あの子を使つて何する気ですん？ 」

市丸の問いに、藍染は微かに口角を上げて微笑んだ。

「 ああ…知りたいかい？ 」

藍染は座っている椅子に肘をつき、何やら楽しそうに問うてきた。

NO・17*その十の文字を。

藍染、お前は如何して俺たちを裏切ったんだ？

今までのお前は一体、何だったんだ。

あの笑顔は、偽物か？

あれは、仮初の姿か？

何が不服だった？

何が望みなんだ？

：

ひゅう、と微かに風が吹いた。金色の髪の毛が、風に靡く。いつも輝きを放っている瞳は、何故か暗く、影を帯びていた。

その碧い目は、一体何を見ているのか。

「たいちよう」

乱菊の唇が微かに動いた。

それと同じに、カサツと唇の乾いた音がした。

如何して、みんな何処かへ行ってしまうの？

「おーいつ乱菊さん！」

ふと、一護の呼ぶ声が聞こえてきた。
振り向くと、一護は此方に手を振りながら駆け寄ってくる。

「一護、如何したの？」

あたしがそう問うと、一護はあたしの目を見て勢いよく言った。

「浦原さんが、虚園へ行かせてくれるってよ！だから、早く行く
うぜー！」

一護は軽い笑顔でそう言った。
でもその瞳には、確かな決意が宿っていた。

眩しい。

乱菊は、微かに目を細めた。

一護の明るいオレンジ色の髪の毛が、風に靡いた。

ああ、この瞳はあのヒトに似ている。

あの翡翠の美しい瞳に。

あのまっすぐな瞳に。

あたしも、頑張らないと。

大切なヒトを取り返さないと。

ちゃんと、背中を護らないと。

あの、“十”の文字が汚れぬように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9756g/>

AFTER DARK

2010年10月11日12時17分発行